

斐伊川水系 生態系ネットワークの取り組み概要について

斐伊川水系 生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会
地域づくり部会 雲南圏域ワーキング

生態系ネットワークとは？

生態系ネットワークとは、生物多様性が保たれた国土を実現するために、保全すべき自然環境や優れた自然条件を有している地域を核として、これらを有機的に繋ぐ取り組みです。ネットワークには地理的に連続している場合のほか、渡り鳥の飛来地のように地理的に連続していない場合も含まれます。

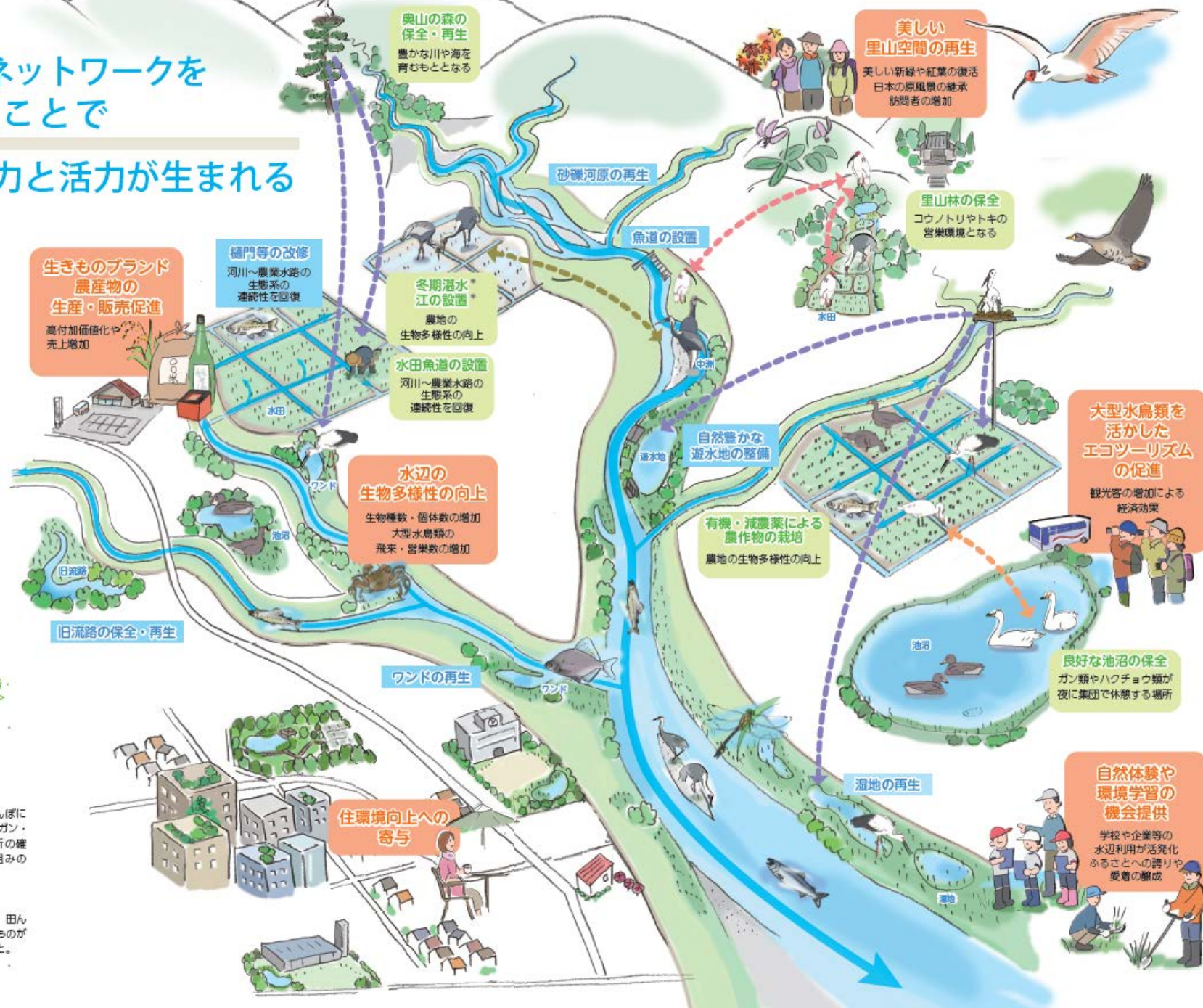
生態系ネットワークの形成により生物多様性の確保を図り、人と自然のふれあいの場を提供することで、地域に社会面・経済面において様々な効果をもたらすことが期待されます。



生態系ネットワークを 形成することで

地域の魅力と活力が生まれる

流域の多様な主体が連携して生態系ネットワーク形成に向けた取り組みを行うことで、地域の自然環境が豊かになるだけでなく、様々な地域振興や経済活性化の効果が期待されます。



・冬期湛水
稲作が行われない冬期に田んぼに水を張り、カエル類の産卵場やガン・カモ・ハクチョウ類の休息場所の確保、雑草の繁茂を抑制する取り組みのこと。

・江（え）
田んぼの脇などに深みを作り、田んぼの水がなくなった時にも生きものが逃げこめるようにした場所のこと。

全国の

主な取組み

河川を基軸とした生態系ネットワーク

様々な方々の参加・協力を得て全国各地で河川を基軸とした生態系ネットワークに関する協議会が設立されています。協議会は主に流域の農家・NPO・企業・自治体などで構成されており、各参加者が生物多様性の重要性について共通の認識をもち、取組みのシンボルとなる指標種や取組みの目標を定め、互いに連携しながら継続的な活動を進めています。



コウノトリ、ふたたび全国の空へそして世界へ

- 生態系ネットワーク推進のシンボル -

かつて、日本各地で見られたコウノトリは、生息環境の悪化などによって数を減らし、1971年に日本の空から姿を消しました。最後の生息地であった兵庫県豊岡市で、兵庫県と豊岡市を中心に1965年から人工飼育と野外の生息環境保全の取組みが進められ、2005年には野生復帰に向けた初の放鳥が行われました。その後、千葉県野田市や福井県越前市、韓国でも同様の取組みが始まるなど、コウノトリ野生復帰の取組みの輪は、全国へ、そして世界へと広がっています。

コウノトリってどんな鳥？

- 【体 長】 約100～110cm
(両翼を広げると約200～220cm)
- 【体 重】 4～5kg
- 【分 布】 ロシア極東地方や中国東北部等を主な繁殖地とし、中国の長江中流域、韓国、台湾、日本に渡って越冬します。現在では、極東地方に2000羽あまりしか生息していません。
- 【生息環境】 主に内陸の湿地（湿原、湖沼、河川、水田、遊水地など）
- 【行動範囲】 概ね巣の場所を中心とした半径2kmの範囲
- 【食 性】 肉食性で、ドジョウ、フナなどの魚類をはじめ、ヘビ、カエル、バッタなどの多様な動物を採食します。飼育下では、1羽が1日あたり約500gの餌を食べます。



■斐伊川水系 生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり

○生態系ネットワークに取り組む目的

私たちの社会活動、経済活動に様々な恵みをもたらす自然生態系を守り育て、未来に継承していくためには、生態系ネットワークの形成という考えが重要となる。
急激な人口減少・少子化、防災・減災、及び、地球環境問題などといった、全国レベルでも地域レベルでも深刻化する各種課題への対策を効果的に進めるためには、生態系ネットワークの形成による自然生態系の保全・再生は、欠くことができない要素と言える。
斐伊川水系を取り巻く自然条件・社会条件は、生態系ネットワークの形成や、自然環境を活かした地域振興を進める上で、全国有数の好条件を備えた地域となっている。



斐伊川水系を取り巻く自然条件

- ・ 斐伊川水系は、ラムサール条約登録湿地に象徴される、多くの大型水鳥類が集まる国際的評価の得られた豊かな水辺環境を有している。
- ・ 特に、わが国の陸水域に生息する希少な大型水鳥類は、①ハクチョウ類 ②ガン類 ③ツル類 ④コウノトリ ⑤トキの5つに大別されるが、これら全てが安定的に生息可能となる潜在性を持つ地域は、斐伊川水系が国内唯一である。

斐伊川水系を取り巻く社会条件

- ・ 生態系ネットワークの推進が、国の主要環境政策として位置付けられている。
- ・ 河川や農地等での関連環境施策の集積が見られ、生態系ネットワーク形成のテーマに基づく官民の広域連携による一体的な活動や事業化を進めるうえでの施設や人材ストックが充実している。
- ・ 現在、佐渡市のトキや豊岡市のコウノトリ等々、大型水鳥類をシンボルとした地域振興が活発化しているが、斐伊川水系では地域固有の全国や海外にアピール可能な資源価値を有している。

本取組では、国際的に重要な湿地である宍道湖・中海を中核として見据え、大型水鳥類を指標とした、水辺環境の保全・再生と地域経済の活性化が両立した生態系ネットワークの形成を目指すものとする。

■ 5つの大型水鳥類が生息できる日本で唯一の地域「斐伊川水系」

日本に生息する
希少な大型の水鳥類は、
主に5つにわけられます。

- ① ハクチョウ類
- ② ガン類
- ③ ツル類
- ④ コウノトリ
- ⑤ トキ

斐伊川水系 <ひいかわすいけい> には・・・

- ① ハクチョウ類 ② ガン類 ③ ツル類 …毎年冬に飛来します。
- ④ コウノトリ …飛来もたびたび目撃されています。
- ⑤ トキ …かつて生息していました。



斐伊川水系には日本で唯一、これら5つの大型水鳥類が安定的に生息するポテンシャルがあります。これらの大型水鳥類がくらせるように、環境づくりを進めていきます。

国際的に重要な湿地である宍道湖・中海を中核として、
大型水鳥類を指標とした自然環境の保全・再生と地域経済の活性化が両立した
生態系ネットワークの形成を目指します

大型鳥類を 指標とする メリット

1 自然と調和した多様な環境が 一体的に存在することの象徴

大型水鳥類の多くは、まとまった良好な水辺を広範囲に移動して生息・繁殖・越冬する習性をもつことから、行政界の枠を越えた広域レベルの水系ネットワークの指標として適した存在です。



2 色々な生きものがくらせる 環境の象徴

大型のガン類やハクチョウ類、ツル類が生息できる河川・湖沼やまとまりのある湿田や湿地は、小型の水鳥類をはじめ多くの生きものがくらしでいける環境条件を有しています。

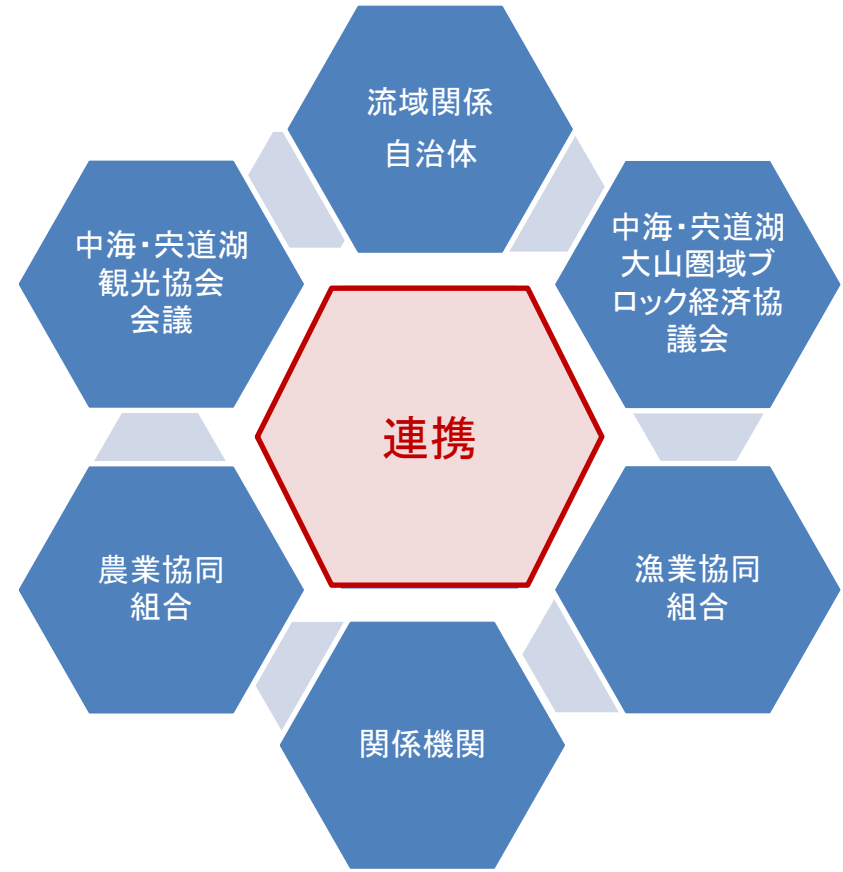
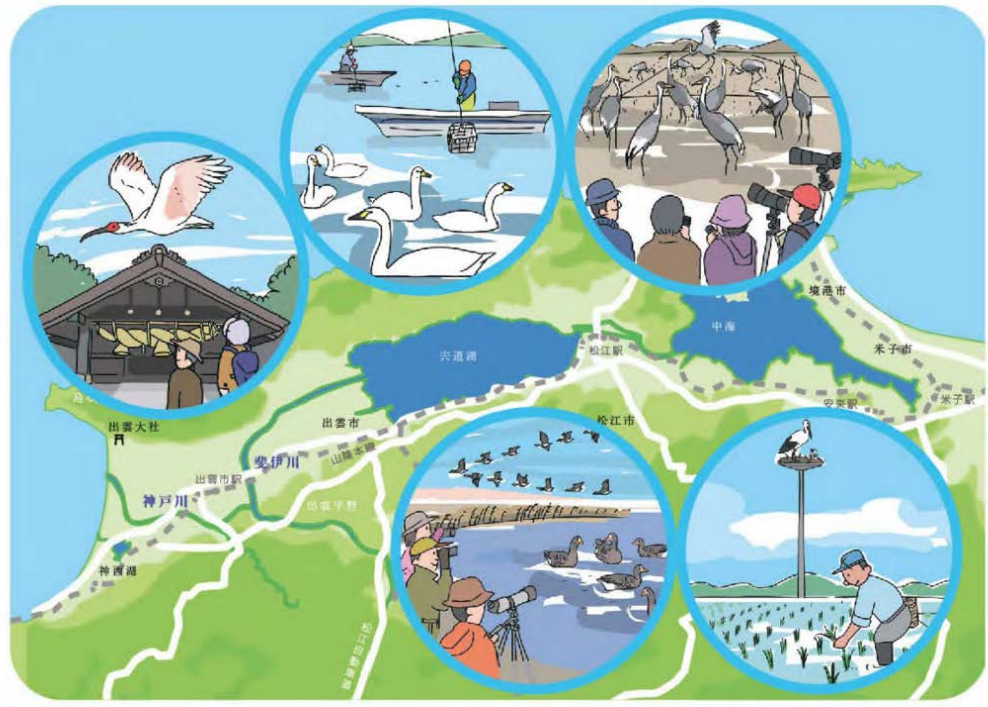


3 アピール性が高く、 広く受け入れやすい

ハクチョウ類やコウノトリなどの白い鳥、ガン類など群れで行動する鳥は目にとまりやすく、取組の効果をアピールするのに適しています。



■大型水鳥類がくらしやすい流域づくりの推進



斐伊川水系 生態系ネットワークによる
大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討
協議会